



Title	ムティエ・サン・ジャンのロマネスク柱頭とクリュニーの西扉口彫刻
Author(s)	ダーリング 常田, 益代
Citation	美術史, 58(2), 215-234
Issue Date	2009-03
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/83764
Rights	初出 : 美術史 58(2)
Type	article
File Information	Tokita2009.pdf



[Instructions for use](#)

ムテイエ・サン・ジャンのロマネスク柱頭と

クリュニーの西扉口彫刻

ダーリング 常田益代

はじめに——研究の目的

フランスのブルゴーニュ地方における最古のベネディクト会修道院ムテイエ・サン・ジャン（以下、ムテイエ⁽¹⁾）はフランス革命につづく混乱の中で破壊され、その遺構は現存しない。しかし、修道院を出自とする数多くのロマネスク柱頭が、今日、米国ハーバード大学附属フォッグ美術館をはじめ、パリのルーブル美術館、デイジヨンの考古学博物館に分蔵されている。また、パール・レ・ゼボワスの館のアルトマイヤー氏所蔵の彫刻断片と、かつて修道院のあつた地に住む個人（複数）の所蔵になる彫刻もムテイエのものと同様に確認されている（文末の現存彫刻一覧を参照）。加えて、米国ペンシルヴァニア州グリーンカーン美術館に伝ムテイエとされる柱頭がある。これらのロマネスク柱頭は説話柱頭と葉飾り柱頭からなり、いずれも高い質を示す。数がまとまって現存し、状態もよく、制作年代の範囲が史料から限定できる、という点で貴重な作品群をなす。

さらに特筆すべきは、ムテイエの柱頭彫刻がベネディクト会クリュニー派の総本山であるクリュニー第三教会堂（以下、クリュニー）の西正面扉口を請け負った彫刻師たちを解明する鍵となる点にある。クリュニーも大交差部の南袖廊のみ

を残して破壊され、西扉口の彫刻に関しては、現存作例があまりにも断片的であるため実証的な研究がなされてこなかった。こうした現状でムテイエの柱頭群は、クリュニーの西扉口彫刻の技法と様式を具体的に把握するための何よりの手がかりになると思われる。

本稿は二つの目的をもつ。第一に、米仏の美術館に分蔵されているロマネスク期のムテイエの柱頭群を本邦に初めて紹介し、柱頭の画面構成とその表現、および彫刻技法の特徴を明らかにする。第二に、ムテイエの彫刻技法に近い作例を探す過程において浮上してくるクリュニー西正面扉口とその周辺から出土した彫刻断片を精査し、ムテイエとクリュニーの両方の作業場に関わった彫刻師集団を実証的に考察する。

一、研究の現状と方法

一九二二年、フォッグ美術館はムテイエのロマネスク柱頭を十二まとめて購入した。当時ハーバード大学の教授だったキングスレー・ポーターがこの「出来事」を紹介し、ここにムテイエの研究が始まった⁽²⁾。数年後、オペールがグループ美術館所蔵のムテイエの柱頭を紹介した⁽³⁾。この時点ではケネス・コナントのクリ

ユニーの発掘は開始しておらず、クリュニーとの比較はなされていない。一九六一年、ザルネキはその著『ギスレベルトウサーオータンの彫刻師』の中でギスレベルトウスの助手の一人が「ムティエ・サン・ジャンの彫刻師」であると説を出した。⁽⁴⁾この説の問題点については後述する。一九七〇年代に入り、サイドルはフォッグ美術館蔵のムティエの柱頭を詳しく解説し、コナントの発掘成果をふまえ、ムティエとクリュニーの関係を示唆した。⁽⁵⁾つづく一九八一年、サパンによりムティエ出自の柱頭が二つ新たに紹介され、その後これらの柱頭はデイジョン考古学博物館に入った。同じ時期に、ストラットフォードは個人蔵のムティエ出自の彫刻断片を紹介し、つづく一九八六年にはカロリング朝からゴシック期におよぶムティエの現存彫刻を網羅した調査研究を発表した。⁽⁷⁾ここにおいて、ムティエの現存彫刻のリストがほぼ完成し、研究の基盤が整ったといえる。

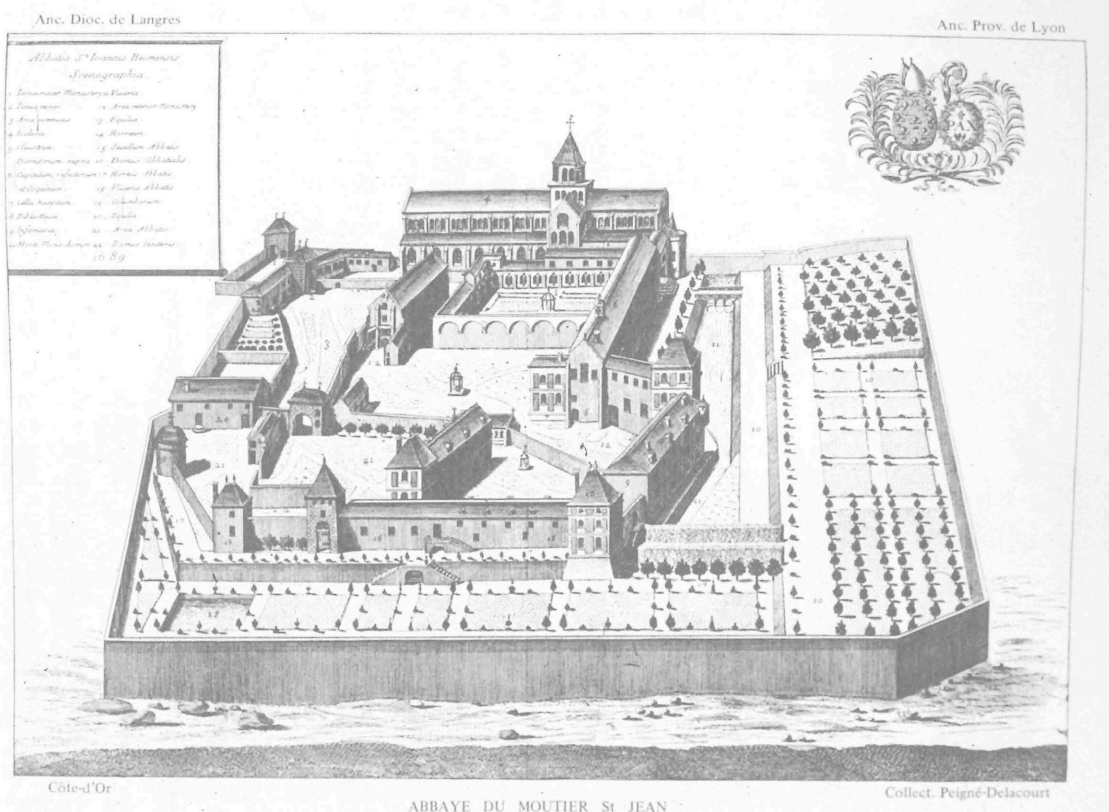
本稿は、これらの先行研究を踏まえつつ、一歩進め、ムティエとクリュニーの関係を具体的に例証するものである。そのために、ムティエの彫刻については米仏の美術館所蔵の作品に加え、近在のブッシーの教会堂柱頭とフラヴィニーの断片を調査した。クリュニーについては元の位置 (*in situ*) に現存する柱頭 (南側廊の一部と南袖廊、南小塔内のガブリエル祭室、ガリラヤ扉口) とファリニエ美術館蔵の柱頭に加え、コナントの発掘により出土した夥しい数の彫刻断片を調査した。出土品の一部はオシエ美術館に展示されているが、ほとんどは未公開のまま収蔵庫で眠っている。筆者は幸い、収蔵庫に保管されている彫刻断片を二度にわたり調査する機会を得た。⁽⁸⁾

コナントのクリュニー発掘は一九二八年に始まり、戦時中の中断を経て、一九五〇年までつづく。コナントは発掘坑を Pit と呼び、発掘の順に Pit I、Pit II と番号をつけ、最後は Pit XC である。筆者はこれらの Pit から出土した彫刻断片を調べている内に、西扉口周辺に位置する発掘地点 Pit II (一九二八年) と Pit X (一九二九年) から出土した断片にムティエの柱頭の彫り方と著しい類似を示す

ものが多いのに気付いた。Pit II と Pit X からの出土品は数が多いばかりでなく、かつて扉口彫刻の一部を成していた使徒像の比較的大きな彫刻断片や彩色の美しく残る断片などを含む。発掘地点と Pit 番号との照合は、オシエ美術館所蔵になるコナントの野帳と小さな Pit 番号図を参照した。⁽⁹⁾

二、ムティエとクリュニーの関係

ムティエ修道院の歴史は五世紀に遡る。『レオンの聖ヨアンニス伝』(*Vita Sancti Iohannis Reomensis*) に拠れば、聖ヨアンニス (以下、聖ジャン) は四二〇年 (一説には四二五年) ブルゴーニュ地方の北部クアルタニアクス (現在のデイジョンとラングルの間) に生まれた。⁽¹⁰⁾聖ジャンはレオム河畔で隠修生活をした後、プロヴァンスのレラン修道院で学んだ。その後、スミュール・アン・オクソワに連れ戻されると、レラン修道院に倣い『聖マカリオス会則』による修道院を築いた。ついでクロウヴィスが聖ジャンに修道院設立の勅許状を与えたのを機に、創始者の名に因み聖ジャンの修道院 (*Monasterium sancti Joannis*) が設立された。その後、『ベネディクト会則』が『聖マカリオス会則』に取って代わると、ローマ教皇の介入が強まり修道院の自律性は弱まり、戒律の遵守は緩んでいった。九一〇年クリュニー会が南ブルゴーニュにその礎を築いたのはこうした時期だった。ムティエとクリュニーとの関係は、九八二年にクリュニー第四代修道院長マイヨールがムティエの院長を兼ねた時に始まった。⁽¹¹⁾院長はクリュニーの儀礼をはじめ典礼書や慣例集などの書物もムティエに持ち込んだ。⁽¹²⁾マイヨールの伝記を著したクリュニー僧ラウル・グラベールは一〇〇三年〜一五年にムティエ・サン・ジャンの僧だったが、この時の修道院の生活と儀礼について言及している。⁽¹³⁾十一世紀になるとムティエはクリュニーの分院の一つに名を連ね、関係はますます強まった。十二世紀に入るとベルナルドゥス二世院長 (在位一一〇九〜一一三三



挿図1 ムティエ・サン・ジャン修道院の伽藍、Michel Germain, *Monasticon Gallicanum*, c.1689, PL. 41 より

年)のもとでムティエは最盛期を迎え、院長は教会堂を新たに建て直した(*Bernardus reomaensem ecclesiam renovavit a fundamentis...*)⁽¹⁴⁾。さらに十二世紀中期のペトルス院長(一一三九〜七九年)の長い統治を経て、ムティエの繁栄は続き、十三世紀前半にはゴシック様式のポーチが増築された。現在メトロポリタン美術館分館のクロイスターズにあるムティエのゴシック扉口はこの時期のものである⁽¹⁵⁾。しかしながら、母修道院クリュニーの運命と同様、十三世紀後半にはじまる荒廃とフランス革命の嵐を経て、教会堂は採石場として売却され、ついには廃虚と化してしまった。

三、ムティエ・サン・ジャンの建築とクリュニー第三教会堂

ムティエの柱頭をくわしく見る前に、まず、建築部材でもある柱頭が組み込まれていた教会堂とその建設年代の枠組みを推定しておこう。本稿で扱うムティエの柱頭は先に言及したベルナルドゥス二世院長が建て直した教会堂のために制作されたものである。献堂式の年代に関する記録はないが、院長が他界した一一三三年以前に完成していたと考えられている⁽¹⁶⁾。仮にベルナルドゥス二世が院長就任(一一〇九年)の直後に建設計画を打ち出し、間髪を容れずに起工したとしても、基礎工事と教会堂低層部の建造期間を勘案すれば、柱頭の制作とその設置の始まるのは早くとも一一二〇年以降と推定される。

一方、最大規模を誇ったクリュニー第三教会堂は一〇八八年に起工し、四〇余年の歳月を経て、一一三〇年に献堂式をみた。その間、一一二五年に西寄りベイのヴォールト崩落という事故に見舞われているから、一一二〇年代に工事は高層部にまで進んでいたことになる。一九八七年のナルテックス発掘、つづく一九九〇年代の南袖廊の発掘調査に依れば、教会堂の建設工事は低層部から高層部に行っていたと推察されている⁽¹⁷⁾。したがって、クリュニーの高層部と西寄りベイの工事、

およびムティエの工事は一二〇年代に同時進行していたことになる。実際、一二〇年代はブルゴーニュ地方の主要な教会堂の建設工事が同時に進行し、優れた請負責任者や彫刻師、石工の往来が最も活発だった時期である。

ムティエの修道院建築を描いた唯一の資料は、一六八九年にミッシェル・ゲルマンが『ガリアの修道院』(Monasticorum Galliarum)のために作成した銅版画である(挿図1)⁽¹⁸⁾。これを見ると、教会堂の南壁に沿う回廊を囲み、集会室、大寝室、食堂、庫裡などを配した典型的なベネディクト修道会の伽藍を示している。外陣は七ベイからなる身廊と側廊に袖廊が南北に張り出し、オータンのサン・ラルザール大聖堂に共通している。また、各ベイの窓は側廊で一つ、身廊の高窓レベルで三つ並び、クリュニーやパレ・ル・モニアルと同じである。さらに、ムティエが属していた旧司教区ラングルの教会堂もクリュニーの建築と彫刻様式を反映していることから推して、ムティエの身廊立面もクリュニーとその系をなす諸教会堂のように三層構成をとっていた可能性は高い⁽¹⁹⁾。

ムティエの現存柱頭には二つのタイプがあり、これらも身廊立面の推察を助けてくれる。一つは長方形底部をもつ扁台形の柱頭(以下、台形柱頭)で、これは溝付きピラスター(以下、片蓋柱)の上に乗っていた。もう一つは半円底部をもつベル型柱頭で、半円付け柱の上に位置する。台形柱頭とベル型柱頭の併用例は、クリュニーやパレ・ル・モニアルにも見られ、クリュニーでは溝のついた古典的な片蓋柱は身廊に面して、半円付け柱は大アーケードの内弧インナドゥスに面して用いられている。ムティエの身廊も同じ形式の複合柱をとっていたかもしれない。ムティエの柱頭の大きさは、ベル型柱頭・台形柱頭の区別なく、高さも幅も61cmから65cmの間におさまる。どれもネッキングと柱頭の胴部が別の石からなる分離式柱頭タイプをしめす。筆者は、古典の伝統を継承する分離式柱頭がクリュニーで導入され、一二〇年代にはクリュニーの建築様式の伝播に伴い、それまでブルゴーニュ地方に流布していた一体式柱頭(柱頭胴部とネッキングが同一の

石)を置き換えていったことを他のところで論じた⁽²⁰⁾。この点から見ても、先に推定したムティエの建設期と柱頭のタイプはうまく符合する。

以上の推察をまとめると、ムティエの教会堂はクリュニーの建築様式をかなり忠実に反映していたと考えられる。すなわち、大アーケード、トリフォリウム、高窓という三層構成をとり、身廊に面して台形柱頭を冠した片蓋柱、大アーケードの内弧にベル型柱頭を冠した半円付け柱という典型的な立面で、この形式の現存例としてはパレ・ル・モニアルがある。その他、クリュニーの建築様式をモデルとして建設されたオータン、ソリュエ、シャロン・スユール・ソヌなど、いずれも一二〇〇〜二五年以降の建物であり、ムティエの建設年代を推定する際の傍証となるだろう。

四、ムティエの柱頭彫刻とクリュニーの彫刻断片

(一) 説話柱頭の彫刻師たち

確実にムティエと断定できる説話柱頭は五つ現存する。画像のテーマは旧約聖書から『カインとアベルの捧げ物』、『ザカリアへのお告げ』、『ダニエルと獅子窟』、新約聖書から『エマオへの巡礼』、世俗主題から『葡萄の収穫』である。このうち三つは台形柱頭、二つはベル型柱頭であるから、説話図像は柱頭の形体に区別なく割り振られていたようだ。

ムティエの説話柱頭の様式を見る前に、まずザルネキの説を紹介しておく⁽²¹⁾。ザルネキに拠れば、オータンの彫刻師ギスレベルトウスはクリュニーからオータンに来て殆ど一人で大聖堂の彫刻を彫り進めたが、『弟子の足を洗うキリスト』(挿図3)と『サムソン』の二つ柱頭は別の人に委ねた。ザルネキはこれらの柱頭をそれぞれムティエの柱頭『エマオへの巡礼』(挿図2)と『カインとアベルの捧

げ物』(挿図8)の右側面『獅子に跨がる男』に比べ、様式的に似ているとした。そして、オータンとムティエのこれら四つの柱頭を同一彫刻師の「手」に帰し、この人をムティエ・サン・ジャンの彫刻師と名づけた。またザルネキはオータンとムティエの『エマオへの巡礼』の画像の酷似も指摘している。

上記オータンの二つの柱頭『弟子の足を洗うキリスト』(挿図3)と『サムソン』は、確かにギスレベルトゥスの「手」ではない。また、オータンとムティエの『エマオへの巡礼』の画像は酷似している。⁽²²⁾この限りにおいて筆者はザルネキの観察を受け入れる。しかし、ムティエの『エマオへの巡礼』(挿図2)と『カインとアベルの捧げ物』(挿図8)の二つ柱頭を同一の彫刻師とし、しかもこの人がオータンで『サムソン』と『弟子の足を洗うキリスト』(挿図3)を彫ったとする説は、様式上、受け入れ難い。結論から言えば、ムティエの『エマオへの巡礼』と『カインとアベルの捧げ物』の二つの柱頭は明らかに別の「手」を示し、これら二人の彫刻師はオータンの『サムソン』と『弟子の足を洗うキリスト』を彫った人とも異なる。

以下この点も含め、ムティエの個々の説話柱頭について画像の構成の仕方、彫刻技法、表現の特徴を記述する。特に、彫刻技法と衣文、人物の細部表現においては、ムティエの彫刻師たちの「手」はオータンではなくクリュニーの西扉口およびその周辺から出土した彫刻断片の中に見いだされることを明らかにする。

『エマオへの巡礼』(マルク伝16:12-13、ルカ伝24:13-28)(挿図2a、2b、4)

エマオの画像はしばしば「エマオでの晩餐」と「復活したキリストの顕現の報告」の場面も含むが、ロマネスクの彫刻や写本挿図に巡礼場面が好んで選ばれたのは、当時の巡礼熱の高まりに加え、宗教劇にこの主題が組み入れられたことも一因だろう。⁽²³⁾ムティエの『エマオへの巡礼』画像は台形柱頭に生真面目に表現されている(挿図2a、2b)。量感のある登場人物は、柱頭胸部の下端を地面と

して同一線上にしっかりと立つ。十字頭光をつけたキリストは右手にもった折りたたみ式杖を肩にかけ左手を挙げ話しかける。素足に長衣を着たクレオパともう一人の人物(ルカ自身?)は、巡礼者の杖を立てキリストと向かい合う。キリストの背後では肉体の重さを感じさせない天使が草葉の上に舞い降り、その頭部は柱頭の左角を占める(挿図4)。反対の右角ではエマオの村を示す建物から角笛をもった若者が身をのり出している。右側面(挿図2b)に見える建物の二階では、窓枠に手をおく男とヴェールを被る女を、階下では肘を窓枠にかけ首を捻り天を見上げる二人の男を示す。この二人はエマオでの晩餐の後、顕現したキリストの昇天を目で追っているかのようだ。これら四人の人物は皆、建物の内部にいたことが空間的に矛盾なく示される。組積構造の建物は当時のブルゴーニュ地方の実物を写すように細部(錠の下りた扉、アーチの迫石、溝彫り付き片蓋柱に葉飾り柱頭)にいたるまでリアルに表され、観る者は聖書の中の巡礼のイメージを現実の巡礼のそれに重ねたことであろう。

この柱頭をオータンの『エマオへの巡礼』に比較してみよう。オータンの人物はみな童顔で肉体の重さはなく、エマオの村を示す建築も半分以上が装飾的な叢に隠され、城壁の前では少年が茎の上に立っている。巡礼という当時の社会関心事をだぶらせた画像を扱いながらも、オータンの彫刻師の手にかかると現実感の希薄な、お伽話のような雰囲気醸し出す。オータンとムティエの柱頭は同じテクニストを典拠とし、同じ時代背景をもつ同じ地方で、柱頭という同じ機能をもった台形の石に刻まれている。さらにこれら二つの作例では、一方の画像がもう一方のモデルにさえなっている。にもかかわらず、両者は画像へのアプローチと、人物と空間の表現においてまったく異なっている。

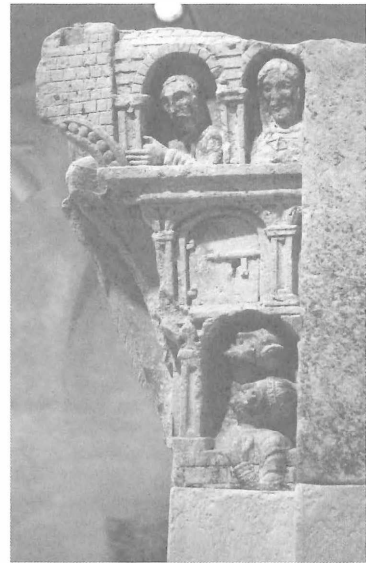
オータンとムティエの違いは彫刻技法にも見てとれる。ムティエの人物の衣文(挿図2a、4)はオータンの櫛で梳いたような平行線条の衣文ではなく、襜の間に浅く凹面にカーブする平行の線が入る。彫り方の点からも、ザルネキの

「手」の同定は否定されねばならない。
 ムティエと同様の衣文はクリュニーの Pit II と Pit X から出土した彫刻断片のうち、西扉口のリンテルを構成していた使徒像断片の中に見いだされる(挿図4、⁽²⁴⁾5)。開いた本を手にし、天を見上げる使徒(Musée Ochier, Conant 232.17,

232.12, 242.2, 242.23)の胸の衣文は規則的に平行に走る緩やかな弧を描き、まさにムティエの衣文と同じ断面を示す。この衣文はクリュニーの周歩廊柱頭にも、東端部から出土した彫刻断片にも見られないし、クリュニー東端部の様式を共有する南ブルゴーニュの彫刻群(アブナス、マコン、アンジール・ルドック、モ



挿図2 a 正面

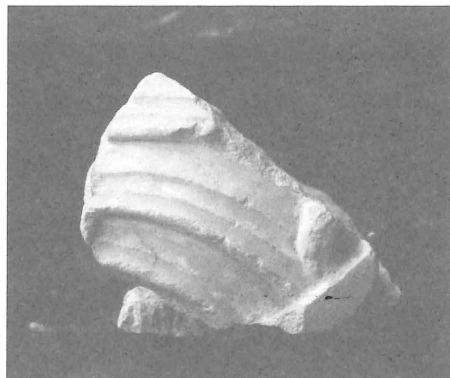


挿図2 b 右側面

挿図2 ムティエ、『エマオへの巡礼』の柱頭、フォッグ美術館



挿図3 オータン、『弟子の足を洗うキリスト』の柱頭、部分



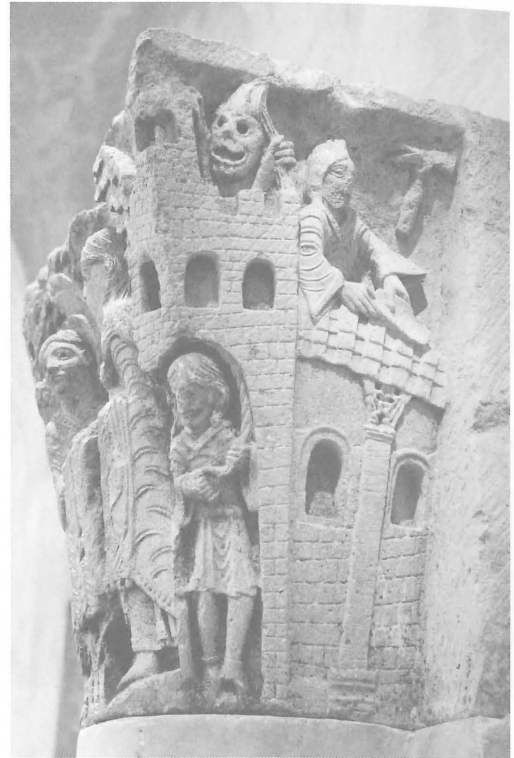
挿図5 クリュニーIII、Pit Xからの彫刻断片、K. J. Conant 1030.59



挿図4 ムティエ、『エマオへの巡礼』の柱頭、キリストの部分、フォッグ美術館



挿図6 a 正面と左側面



挿図6 b 右側面

挿図6 ムティエ、『ザカリアへのお告げ』の柱頭



挿図7 「ロバに乗った聖人のスパンドリル」、作者不明

Harvard Art Museum, Fogg Art Museum, Alpheus Hyatt Purchasing Fund, 1949, 47, 70. A
Photo: Imaging Department © President and Fellows of Harvard College

ンソ・レットワール)やペルシ
ーやヴェズレー(ナルテック
スの南北扉口)にもない。
クリュニーの西扉口から発
掘された人物(主に使徒)の
髪型は真中で左右に二分され、
生え際にそって後に撫で付け
られている。この髪型もムテ
イエと共通する(挿図4)。
さらに長衣の襟ヨークとそれ
を縁取る連珠飾りといった細
部も両者に共通する。ムティ
エの巡礼者キリストの顔の輪
郭と見開いた大きなアーモン
ド形の目(挿図4)は、Pit
Xから出土した断片(Musée
Ochier, Conant1050)にきわ
めて近い。以上の観察から、
ムティエの『エマオへの巡
礼』の彫刻師は、クリュニー
の西扉口彫刻の制作にも関わ
っていたと推察される。どち
らが先であったかは断定しが
たい。



挿図8 b 正面



挿図8 c 右側面

『ザカリアへのお告げ』（ルカ伝16:19-31、挿図6 a、6 b）

ベル型柱頭の胴部は正面と側面が滑らかに連続する。しかし、『ザカリアへのお告げ』の彫刻師は建築モチーフを使って正面と側面を区切り、さらに左側面と正面にはドリット装飾帯付きアーチを連続させて教会堂内部の場面設定をする。正面では、祭壇の背後で香炉（破損）を振るザカリアの前に大天使ガブリエルが現れ、エリザベトの懐妊を告げる（挿図6 a）。ザカリアは驚きのあまり口がきけなくなったというルカ伝の記述を物語るかのように、口をわずかにひらき、目を見開く。祭壇に掛かる布はたつぷりとしたドレープを描き、縁には連珠房飾りがついている。左側面では、アーチの下で頭光をつけた老女（エリザベト？）が少年（洗礼者ヨハネ？）に話かけている。右側面（挿図6 b）では修道院とおぼしき組積構造物の屋根の上で修道僧が瓦を葺き、その傍にハンマーが見える。塔の頂で己の髪を掴む悪魔が大きな顔を出し、塔の下では少年が鐘楼の綱を引っ張っている。この部分の図像が何を意味しているか不可解だが、現実感のある同時代の建築表現が目される。塔と悪魔の関係については、二〇〇五年二月にクリュニーのツール・デ・フロマージュで鬼の彫刻断片が発見されたから、当時、特別な意味があったのだろう。塔は軍団の長ミカエルの場であるから、同時に退治されるべき悪魔の出口でもあったのか。

この柱頭の人物像の衣文は、先に見た『エマオへの巡礼』のそれとは異なり、角のはっきりした二本の平行線を描く（挿図6）。この衣文に酷似する作例がフォッグ美術館所蔵のスパンドリルの彫刻断片（Fogg. no.1949.47.70）に見られる（挿図7）。スパンドリルの少年の顔の輪郭から耳にかけての肉付けは『ザカリアへのお告げ』の少年に酷似している（挿図6 a、7）。さらに筆者は、このスパンドリルとメトロポリタン美術館の分館クロイスターズにある天使の彫刻断片も同じ手と考える。この天使の出自はかつてムティエとされていたが、石質のニユートロン・アクティベーション分析の結果、ムティエの石灰石の属性分布とは



挿図8 a 左側面

挿図8 ムティエ、『カインとアベルの捧げ物』の柱頭

パレ・ル・モニアルなど当時のクリュニー様式の教会堂にしばしば見られる。

『カインとアベルの捧げ物』（創世記4:3-5 マタイ伝13:24-42 挿図8 a~c）

台形柱頭の正面でカインとアベルが神に捧げものをしている（挿図8 b）。兄のカイン（向かって右）は片膝をつき、きちんと束ねた麦を両手で直（じぶ）にもち、神に献ずる。カインは髻をたくわえ、髪は短く、頭光はない。弟のアベル（向かって左）は、捧げものに触れないように両手を布で覆い、両膝をつき小羊を捧げる。長い髪を肩まで垂らした若いアベルに髻はないが、装飾で縁どられた大きな頭光をつけている。向かい合う兄弟の足もとでは、両翼を広げた双頭の鷲が捧げものを受ける祭壇のような役割をしている。兄弟の頭部は柱頭の両角上端に位置し、背から腰にかけての線が柱頭の稜線となる。兄弟と鷲が台形柱頭の両端と低部に密に彫られているの対し、柱頭中央の地は半円形にそのまま残こされ、ここがこの凶像の核である小羊と麦束が彫り出されている。柱頭の冠板（アプス）を占める雲間からびる神の大きな手は、『最後の審判』における神の右側と左側を暗示するかのようになり、右側の小羊を祝福する。手から見た右側、すなわちアベルの頭上には ABEL CUM PRIMICIS、左側カインの頭上には CAIN CUM LOLIO の銘が刻まれている。カインのもつ Lolio は毒麦または害悪を意味する⁽³⁰⁾。

アベルは横からみると、そのしつかりとした体軀にもかかわらず、衣を風に靡かせて飛翔する天使のようである（挿図8 a）。その背後には健やかな幹からのびた枝が大きな松毬（実？）を撓わにつけ、楽園の聖樹を象徴しているかのようだ。これに対しカインの背後の右側面（挿図8 c）では、男が獅子の頭部と爬虫類の鱗状腹部と龍のような尾（破損）をした合成動物に跨がっている。男の頭部と上半身の一部が破損しているため、凶像の同定は難しいが、四つ足の獅子ではなく大きな尾のある怪物にみえるから、悪を罰する図であろう。

この柱頭の「手」は、先に見た『エマオへの巡礼』とも『ザカリアへのお告

異なりクリュニー西扉口のものと同じであることが判明し、同定し直された⁽²⁸⁾。クリュニーの天使とムティエの柱頭とフォッグ美術館のスパンドリル人物像の三点に共通するのは衣文ばかりでなく、大きく抉った腫や目の輪郭線の彫りにも見られ、同一の「手」を示唆しているだろう（挿図6 a、7）。一方で、クリュニーの周歩廊柱頭と様式的に同じ系譜にある先述の南ブルゴーニュ地方の彫刻群には、未だこのように腫を大きく穿つ彫り方はなかった。ムティエとクリュニー西扉口出自の人物像では、象眼を意図したと思われる目の扱いが特に顕著である⁽²⁹⁾。

ムティエの『ザカリアへのお告げ』の人物像と建築空間の関係を見ると、オータンやヴェズレーの柱頭にあった前後関係の細かな矛盾は解消し、理に合う空間が達成されている。また、場面設定をなすアーチのピリット装飾帯はクリュニーの祭壇仕切り柵（Musée Ochier, Conant inv. 54.17, 54.3033; 58.02.24）を彷彿と

『カインとアベルの捧げ物』の柱頭に比較しうる作例を探せば、ここでも、クリュニーの西扉口のテュンパヌムを構成していた鷲（ルーブル美術館）やマンドラ周辺(31)の雲（オシエ美術館）に近い。

『葡萄の収穫』の柱頭（挿図9）

『カインとアベルの捧げ物』の柱頭で観察した画面構成と衣文の特徴がルーブル美術館所蔵の『葡萄の収穫』の柱頭（挿図9）にも見られる。ここではベル型柱頭胸部の連続面に右から左へ、葡萄の収穫、潰し、葡萄酒造りというプロセスを順に展開していく。(32) 右側面では、撓わに突った葡萄の木の下で籠とナイフをもった少年が思わず葡萄を口に運ぶ。その前方では、男が収穫した葡萄の籠を重そうに背負い、同時に大きな木樽の中に右足を入れ、葡萄を潰す。さらにその前方（左側面）では、顎鬚のある男が搾取した葡萄の果汁を樽に移しかえている。(33) 葡萄の収穫から葡萄酒づくりに至るまでに必要な道具類はどれも正確に表現され、わかりやすい。

『カインとアベルの捧げ物』そして『葡萄の収穫』の柱頭は、主題の性格や柱頭の形の違いにもかかわらず、共通して主要人物を柱頭両端の稜線にそろえて配置し（どの角度からもよく見える位置）、図像に不必要なものは除き、鍵となるモチーフを柱頭胸部の地から浮き上がらせるといった手法を見せている。

これら柱頭に見る細く丸い結び紐のような断面をもつ衣文は独特である（挿図8a）。同じ「手」ではないが、類似した紐状の衣文がクリュニーの西扉口周辺から出土した彫刻断片のいくつかに見られる（挿図10）。この衣文はクリュニーの周歩廊柱頭とその様式を共有するアブナス、アンジー、マコン、ペルシー、モンソ・レトワール、ヴェズレーのナルテックス南北扉口のそれとは別のものだ。ピエール・カレはブルゴーニュ地方の彫刻にラングドック地方の影響をみるが、



挿図9 ムティエ、『葡萄の収穫』の柱頭、ルーブル美術館



挿図10 クリュニー、オシエ美術館収蔵庫、Pit IIからの彫刻断片、K. J. Conant 212.11

ル・グラン（Busc-le-Grand）の身廊柱頭の「マンドラの中に立つ人物」が(33)この衣文を示す。

『獅子窟のダニエル』（ダニエル書6:16-24 挿図11）

この台形柱頭は、かつてムティエ修道院のあった場所から一九七九年に発見さ

『カインとアベルの捧げ物』の彫刻師はラングドック地方の様式を知っていたのかもしれない。(34) その他の例では、ムティエ近在のブッシ



挿図11 ムティエ、『獅子窟のダニエル』の柱頭、ディジョン考古学博物館
La France romane (Musée de Louvre, 2005) cat. 270より

れ、一九八二年にディジョン考古学博物館 (inv. 983.6.1.) に入ったものだ。⁽³⁶⁾ 柱頭の正面を占める大きなマンドルラを背にし、頭光をつけ、長衣を着た髯の男が彼方を見つめ、両手を胸の前に出して祈っている。マンドルラの左縁に刻まれた「DANIE...」という銘から『獅子窟のダニエル』の図像と分かる。マンドルラの左右では各々二頭の獅子が（左の一頭は欠損）その端を齧っている。右側面にも一頭の獅子が見える。

この柱頭はまた別の「手」を示している。瞳を大きく割り貫いた目、豊かな飾り付きのヨークはクリュニーの西扉口彫刻の人物像に共通する特徴でもある。この柱頭に使われている刻銘入りの大きなマンドルラや、髯をたたんだ衣文はクリュニーの周歩廊柱頭の系譜をひいている。この髯は周歩廊ばかりだけでなく、Pit II と Pit X から出土した西扉口リンテルの使徒断片 (Musée Oclier, inv. K.J. Conant 235.1, 242.3; inv. III 740) の中にも見つけられる点は留意すべきだ。

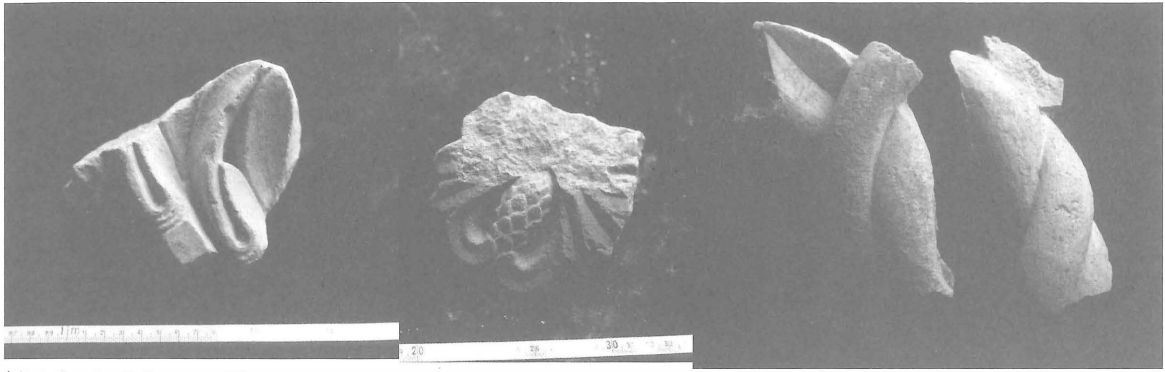
換言すれば、西扉口とその周辺の彫刻には、東端部の延長上にある様式と東端部には未だなかった様式が混在していたことの証左となるからだ。

以上、確実にムティエとされる五つの説話柱頭を見た。⁽³⁷⁾ ここで、ムティエの彫刻師集団と説話柱頭に共通する特徴をまとめておく。

(一) 現存する説話柱頭はそれぞれ異なる特徴を示し、複数の彫刻師により制作されたと考えられる。『エマオへの巡礼』を彫った人、『ザカリヤへのお告げ』を彫った人、『カインとアベルの捧げ物』および『葡萄の収穫』を彫った人、『獅子窟のダニエル』を彫った人である。特筆すべきは、個々の違いを越えて、どの彫刻師の「手」もクリュニーの西正面扉口とその周辺から出土した彫刻断片の中に、それぞれに対応する「手」が見つけられることである。ムティエの彫刻師たちは、クリュニー西扉口のリンテルやおそらくテュンパナムも手がけた腕利きの彫刻師集団のメンバーであった可能性が高く、彼らの中にはブッシーやフラヴィニーでも仕事を残した人がいたと推察される。彼らが工房単位で移動していたか、数名の彫刻師集団としてであったかは分からない。

(二) ムティエの説話柱頭の画面構成はその骨組が明快である。特に、図像の意味を真面目に伝えるために、図像の鍵となる人物や要素を柱頭の形状にうまく適合するように配置し、説話を展開している。ここでは、柱頭という形体が構成の大きな拘束となっていた形跡はもはやなく、人物のプロポーションや所作も極端に歪められるということはない。

(三) ムティエの現存する説話柱頭を見る限り、オートタンやヴェズレーの柱頭にしばしば登場した幻想上・空想上の生き物は姿を消し、荒唐無稽な表現や非論理的な場面設定もみられない。現存作例を見る限りムティエの彫刻師たちは、当時の生活の中で目にしたであろう建物や道具などを正確に描写することにより、説話を身近な出来事として表現している。



挿図13 a Pit X Conant 1009.8

挿図13 b Pit X Conant 1037

挿図13 c Pit XL Conant 4208 - 1 & 4204 - 8

挿図13 クリュニー、オシエ美術館収蔵庫



挿図12 ムティエ、葉飾り柱頭、フォッグ美術館 (inv. 1922.26)



挿図14 ムティエ、葉飾り柱頭、フォッグ美術館 (inv. 1922.27)



挿図15 ムティエ、葉飾り柱頭、フォッグ美術館 (inv. 1922.25)



挿図16 クリュニー、彫刻断片、オシエ美術館収蔵庫 (inv. 84-5-10)

(四)ブルゴーニュ地方の説話柱頭(例、ヴェズレー、オータン、ソーリュ)では、葉飾り柱頭の中で話が展開するかのようになり、叢と木が舞台設定や余白・空隙の充填に、あるいは装飾効果のために積極的に使われていた。これに対し、ムティエの現存説話柱頭にはこのような叢の使い方は見られない。ムティエの草や木は楽園の示唆や、葡萄畑といったそれ自体、図像の意味を担う要素として用いられている。

(五)個々の手の違いをこえて、ムティエの彫刻師たちが用いた幾つかの彫刻技法(例、深く大きく穿った目)と細部表現(例、長衣の衿飾りなど)は、クリュニーの西扉口彫刻断片(例、リンテルの使徒像)や Pit II、Pit X から出土した断片にも共通する。こうした技法や細部は、クリュニーの東端部の彫刻(例、周歩廊柱頭)と、様式的に直接つながる一連の作品(例、アブナス、マコン、アンジール・ルドック)には未だ見られなかったものである。また、これらの周歩廊柱頭と緊密にかかわる南ブルゴーニュの柱頭がまだ分離式柱頭タイプに移行していない点も勘案すれば、これらは明らかに一世代前の作品と考えられる。

(二) 葉飾り柱頭の特徴

一般に葉飾り柱頭は現存作例が最も多いことと図像による制約がないため、ある特定の時期に好まれた意匠や彫刻技法の水準と傾向を把握するのに大いに役立つ。また、彫った人の美意識と構成力もよく見てとれる。ムティエの葉飾り柱頭はフォッグ美術館に十あり、どれも状態がよく、堂々たるものである。その内、七つがベル型柱頭、三つが台形柱頭である。デイジョン考古学博物館にも台形葉飾り柱頭がある。以下、ムティエの葉飾り柱頭の構成と特徴を記述し、クリュニーおよびその他のブルゴーニュ地方の柱頭の中に位置づけることにする(柱頭の記述には美術館の所蔵番号を用いる)。

ベル型柱頭一 (Fogg Museum, inv. 1922.26 挿図12) はコリント式柱頭に做った構成をとり、ムティエの葉飾り柱頭の内でもっとも古典的な趣を示す。すらりとした柱頭胴部(高さ64・8 cm、幅63・5 cm)の上段で大きなアカンサス葉が正面を三分すると、葉と葉の間からのびる茎が左右に分かれ、柱頭の機能の肝所となる両角と中央で渦を巻く。渦巻の下では、大きな葉がしなやかに折り返り、葉先をS字形に巻き上げる(挿図12)。下段のアカンサスは上段のモチーフを繰り返すが、上部の弾性のある葉を引き立てるように胴部のプロフィールから大きく張り出すことはない。冠板は中央にふつくとしたロゼットを置く。

ベル型柱頭二 (Fogg Museum, inv. 1922.27 挿図14) も基本的にはコリント式のタイプに属するが、ここでは胴部を三段構成にし、最下段をアーチ列にする。そのアーチ列の頂に水平連珠帯を一巡させ、その上にアカンサス葉で中段を作る。さらに葉の間からのびる茎を左右に広げ、両角と中心軸で渦巻を構成する。

これら二つの柱頭はフアリニエ美術館所蔵の葉飾り柱頭(内一点は周歩廊柱頭)に比べ、より装飾的で凹凸に富んだ複雑な彫り方を示している³⁸⁾。また、ムティエの葉の分岐点に浅く彫られた二本の平行線はクリュニーの西扉口前方 Pit X から出土した断片(挿図13 a)に共通するが、周歩廊柱頭やその様式を共有する南ブルゴーニュ地方の葉飾り柱頭には未だみられない。この技法はクリュニー以外ではオータンの葉飾り柱頭に見られる。

ベル型柱頭三 (Fogg Museum, inv. 1922.25 挿図15) は柱頭の形体と葉飾りモチーフの構成が見事に合致した力強い作である。この柱頭を彫った人は、卓越した技術を駆使し、古典の葉飾り柱頭の有機性とは異なるロマネスクらしいデザイン性のある葉飾り柱頭を完成させている。構成は中心軸上と稜線上に大きなア



挿図17 ムティエ、葉飾り柱頭、フォッグ美術館 (inv. 1922.24)



挿図18 ムティエ、葉飾り柱頭、フォッグ美術館 (inv. 1922.21)



挿図19 ムティエ、葉飾り柱頭、フォッグ美術館 (inv. 1922.22)



挿図20 ムティエ、葉飾り柱頭、フォッグ美術館 (inv. 1925.9.1)

カンサスを二段に繰り返し、それぞれ下方にのびた葉が松毬を包む。正面では左右からのびるアーチ形鱗帯が交わり扱れる。同様の鱗帯が冠板にも走り、中央で小さな松毬をつける。同じモチーフを反復しながら単調にならないのは、形体に即した葉と松毬のヴォリュームの分配、質感の変化、そして切れ味のよい彫りに負うところが大きい。

意匠においても彫刻技法においても、この柱頭に酷似した彫刻断片 (Musée Oclier. Inv. 84-5-10) がクリュニーの收藏庫にある (挿図16³⁹)。この断片はコナントが一九二八年にクリュニー駅近辺の家で発見したものだ。コナントは、この彫刻断片が西扉口階上部にあった聖ミカエル祭室の一部を構成していた、と推察した。しかし、彫刻断片の上下を逆にすれば明らかなように、斜め下細りになった彫刻部と石の形状と大きさから、柱頭の右側面であったことが分る。コナントとサイデルがすでに示唆している通り、ムティエの葉飾り柱頭とクリュニーのこの断片は同じ彫刻師が両方の作業場⁴⁰に前後して関わっていたことを実証している。

両者に共通する松毬モチーフはクリュニーではいつごろから使われはじめたのだろうか。このモチーフは周歩廊柱頭と東端部から出土した現存彫刻断片にはいまだみられないが、南袖廊の南壁の上層にある小柱頭にその早い例が現れる。この例では松毬の表面に手の込んだ質感は刻まれていない。これに対し、Pit Xから出土した断片(挿図13b)では、松毬の付け根のW形の部分も葉の中央の凹みも、ムティエの柱頭とまったく同じになる。とすれば、先のクリュニーの柱頭断片(挿図16)もおそらく西扉口周辺部の柱頭の一つであったと推察される。

逆松毬モチーフはブルゴーニュ地方で流行したらしく、ヴェズレーのナルテックスの柱頭、オートタンの内陣柱頭、ブッシーの身廊柱頭に散見する。これらの柱頭の彫刻師の手は異なるが、いずれも一一二〇年代から一一三〇年代に制作された柱頭であり、同一モチーフの変奏といえる。

ベル型柱頭四(Fogg. Inv. 1922.24 挿図17)は対角線の構成をとる。柱頭の両角低部からのびる連珠紐がアーチをつくり、中央で一度振じれて下向きに葉を開き松毬を包む。この手法は先の柱頭でもみたが、異なる点は左右からのびる連珠紐とアカンサスの源が両角低部の葉陰に潜む人の口になっていることだ。対角線の交点となる中央の茎に環がつき、そこから葉が左右に広がり、両角の渦巻の下で折り返る。胴部と冠板の接点に六弁のロゼットがつく。

ベル型柱頭五(Fogg. Inv. 1922.23)とベル型柱頭六(Fogg. Inv. 1922.21 挿図18)は同じ構成を示す。ロマネスクの彫刻師はしばしば一对の同じ柱頭を制作した。極度に様式化された大きな葉が放物線のような弧を描き、主脈の頭に丸い実(??)を結ぶ。葉と葉の間から茎が立ち上がり、節の上で二股に分かれ、中心軸上と両角で同様の丸い実をつける。さらに柱頭最上部の茎もY字に広がり、下の構成をなぞるように繰り返す。冠板はいまだ荒削りの状態を示す。

ムティエのこれらの柱頭に類似する柱頭はクリュニーにあるだろうか。強いて挙げれば、オシエ美術館にある大柱頭(Musée Ochier, inv. 78.27)と南袖廊の塔の柱頭であろう。しかしどちらの場合も、後退した柱頭胴部と極端に様式化した渦巻からしてムティエの作例より遅い時期のものと思われる。ムティエのこれらの柱頭のヴァリエーションは近在のブッシーにみられるが、ここでもモチーフの単調な繰り返しが進んでいる。

ベル型柱頭七(Fogg. Inv. 1922.22 挿図19)はY字型の構成をとる。正面の中心軸から主幹が立ち上がり、Y字に分かれ、各々がもう一度分岐し両角と中心軸上で実をつける。主幹のY字分岐点の前方でもう一对の枝が交叉し、側面から伸びてきた同類の枝と絡まり大きな葉を広げる。柱頭の右側面の葉脈が細部まで彫刻されているのに対し、冠板はいまだ荒削りの段階であるから、この柱頭も未完成のまま設置されたのだろう。構成は単純に見えながら、胴部の地、丸い幹、その前方で交叉する一对の枝といくつもの面が立体的に重なり手が込んでいる。このように交叉した丸い枝は珍しいが、Pit XI(発掘地点、南大袖廊より西よりの身廊ベイ)から出土したクリュニーの彫刻断片の中にも見い出される(挿図13c)。ムティエのこの柱頭は『カインとアベルの捧げ物』の左側面の樹木によく似ている(挿図8a)。

台形柱頭一(Fogg. Inv. 1922.16)は扁平な横長胴部を示す。台形柱頭にベル型柱頭のアカンサス構成を移したため、中段で同じ大きさのアカンサス葉が四回繰り返す単調な構成になってしまった。表面的な技巧に走らないアカンサスの彫り方はクリュニーの南袖廊の大柱頭やファリニエ美術館の葉飾り柱頭に近い。

台形柱頭二(Fogg. Inv. 1922.20)と台形柱頭三(Fogg. Inv. 1925.9.1 挿図20)およびディジョン考古学博物館の台形柱頭(Inv. 982.2.1)の三つは、どれも正面

の中心軸から幹が立ち上がり、左右二股にわかれ、両角で大きな渦巻をつくるという同様の構成を示す。⁽⁴³⁾ フォックグの台形柱頭二 (Inv.1922.20) では渦巻の下で大きな厚い葉が折り返して柱頭の輪郭線を描く。台形柱頭三 (Inv.1925.9.1 挿図20) とデイジョンの例 (Inv.982.2.1) では、平たい葉に大小のドリル孔を深く穿ち、レースのような効果を作っている。

以上、ムティエの葉飾り柱頭の構成と彫刻技法の特徴を観察し、それらに対応する作例をクリュニーの葉飾り柱頭 (断片を含む) とブッシーなどに見た。その結果、ムティエの彫刻技法の特徴と比較しうる例は次のようにまとめられる。

(一) 葉と葉の分岐点にはいる二本の線刻 (挿図12、13 a)。この細部は、クリュニーの周歩廊柱頭とその様式を共有する南ブルゴーニュの柱頭にはいまだ見られない。これに対し、クリュニーの西扉口附近 Pit X から出土した彫刻断片 (Conant 1009.8) をはじめ、回廊や身廊の西寄りベイ、また西扉口周辺とされる柱頭にはみられる。

(二) 細長い葉の中央にはいる谷折線のような線刻 (挿図15)。この細部技法もクリュニーの東端部の柱頭にはないが、クリュニーの Pit X 出土の断片 (挿図13 b) をはじめ、ヴェズレーのナルテックスの葉飾り柱頭と説話柱頭、またオーターとブッシーの柱頭では頻繁に用いられている。

(三) 細長い葉の主脈をなす凸状の峰線 (挿図12)。この技法も、上記(一)と(二)の技法と同様、クリュニーの周歩廊柱頭にはないが、西扉口の「抱き」の彫刻断片 (Musée Ochier inv. Conant 1031.1, 1055.3, 1056A) には見られる。⁽⁴⁴⁾

(四) S字形にカーブして持ち上がる弾性のある葉先。この複雑な彫り方はクリュニーではその早い形が南袖廊高層部の大柱頭やファリニエ美術館の葉飾り柱頭の細部にみられる。また近年、袖廊と南側廊の交点となる壁体最上層の内部から姿を現わした葉飾り柱頭では、このモチーフがよりダイナミックに扱われている。

(五) 松毬、連珠、鱗飾りなどのモチーフで豊かに装飾する傾向 (挿図15)。こうした装飾技巧は一二〇年以降しだいに顕著になり、ヴェズレーのナルテックスやオーター、ブッシーにも現れ、ついにはシャルリュエの北扉口において爛熟の域に達する。

結論

本研究は、フォックグ美術館、ルーブル美術館、デイジョン考古学博物館などに分蔵されている旧ベネディクト会修道院ムティエ・サン・ジャンのロマネスク柱頭彫刻の特質を考察するとともに、母修道院クリュニー第三教会堂西扉口彫刻との関係を明らかにしたものである。柱頭の観察と分析に先立ち、まず、ムティエの教会堂に言及した史料から、その建設年代が一二〇年代以降一三〇年初頭と確認された。また、銅版画に描かれたムティエの建築様式と分離式タイプの現存柱頭も、クリュニーの建築様式が伝播した一二〇年以降の枠組みを示唆している。ムティエの柱頭の観察からは、複数の彫刻師の「手」が判別された。それぞれの彫刻師の「手」に類似する様式と技法をブルゴーニュ地方のロマネスク彫刻に探すと、どの「手」の場合も、クリュニーの西正面扉口と、その周辺の発掘坑 Pit II および Pit X から出土した彫刻断片の中に見いだされた。ムティエとクリュニー西扉口に共通する彫刻技法は、説話柱頭では衣文や顔の造作 (目、髪型) であり、葉飾り柱頭では葉の彫り方や装飾的な細部技法である。こうした傾向は、クリュニーの工事が上層部から西扉口近くに進むにしたがい顕著になる特徴であり、大修道院建設工事 (ナルテックスを除く) の最終段階に当たる。注目すべきは、ムティエとクリュニーに共通する様式の特徴はクリュニー建設工事の前期と考えられる東端部の周歩廊柱頭と、その様式に緊密に関わるアブナスやアンジー・ル・デュックなどの作品群にはいまだ見られなかったものである。ムテ

イエの柱頭に見る形状と彫刻技法、豊かな裝飾意匠、そして現実感のある表現への興味といった点を総合的に考えれば、その制作時期は一一二〇年代から一一三〇年初めと推定され、史料と建築から引き出された年代的枠組みと一致する。ムティエの柱頭の制作年代の確立と、それらを制作した彫刻師集団がクリュニー西扉口の彫刻をも請け負ったとする結論を考え合わせれば、クリュニー西扉口彫刻の年代もそれに近いことになるだろう。このことは、クリュニー西扉口を一一一五年頃とした従来の年代の再考を促すばかりではない。ムティエとの比較からより明らかになったクリュニー西扉口の彫刻様式と新たな推定年代は、クリュニー西扉口彫刻の影響の範囲をより限定したものにす。したがって、従来考えられていたクリュニー西扉口の年代を前提として、その影響下でアンジー・ル・ドゥックやモンソ・レトワールの扉口が制作されたとする説も再考を要することになる。

註

- (一) Moutiers-Saint-Jean (Côte-d'Or県) は旧司教区 Langres の南西に位置する。ムティエ・サン・ジャンに關する近年の出版物は Moutiers と語末に“s”のつく綴りや“s”のみ Moutier と綴るものがある。
- (二) A. Kingsley Porter, “Romanesque Capitals,” *Fogg Art Museum Notes* 2 (1922): 23-30.
- (三) Marcel Aubert, “Un chapitre roman de Moutiers-Saint-Jean (Côte-d’Or),” *Bulletin des Musées de France* (1929): 142-145.
- (四) D. Griyot & G. Zarnecki, *Gislebertus, Sculptor of Autun* (ズル Zarnecki, *Gislebertus*) (New York, 1961), 63, 73, 176.
- (五) Linda Seidel, “Romanesque Sculpture in American Collections IX. The William Hayes Fogg Art Museum,” *Gesta* XI/1 (1972): 59-76.
- (六) Christian Sapin, “Deux chapiteaux Moutiers-Saint-Jean,” *Mémoires de la Commission des Antiquités du Département de la Côte d’Or* XXXII (1980-1981): 315-25.
- (七) Neil Stratford, “Sculpture romane originaire de Moutiers-Saint-Jean,” *Mémoires*

de la Commission des Antiquités du Département de la Côte d’Or XXXII (1980-1981): 327-35; *idem*, “A sculpture médiévale de Moutiers-Saint-Jean (Saint-Jean-de-Reôme),” *Congrès archéologique de France (144e session 1986, Auxois-Châtillonnais)* (1989): 157-201.

(八) 一九八八年鹿島美術財団助成金による最初の調査では殆どの発掘地点から出土した断片を見た。平成十五年度～十六年度科学研究費補助金(基盤研究助(二))による二度目の調査では、発掘坑 Pit II と Pit X から出土したものを重点的に調べた。

(九) コナントによる発掘地点と Pit 番号の照合についての詳細は、拙著『第三次クリュニー修道院の西正面扉口彫刻とムティエ・サン・ジャン工房について』(以下『ムティエ報告書』)平成十五年度～十六年度科学研究費助成金(基盤研究(二))研究成果報告書、二一四頁、図を参照されたい。留意すべきは、彫刻断片は爆破により飛散しているから、出土地点はあくまでも出土地点であり、必ずしも *in situ* の時の位置とは断定できないことである。

(十) Petrus Roverius, *Reomans, seu historia monasterii Sancti Joannis Reomansensis in tracta lingonensi* (Paris, 1637) 筆者は未入手。本稿は P. A. Vitenet, *L’Abbaye de Moutier-Saint-Jean. Essai historique* (ズル Vitenet, *Moutier-Saint-Jean*) (Mâcon, 1938) に依る。Vitenet 著は De Lanneau, “L’Abbaye de Moutier-Saint-Jean,” *Bulletin de la société des sciences historiques et naturelles de Semur-en-Auxois (Côte-d’Or)* VI-VIII (1869-70): 67-69. 又の書は T. P. Halton, “John of Reôme, Saint,” *New Catholic Encyclopedia*, vol. VII: 1068; *Dijon, Sculpture médiévale en Bourgogne, Collection lapidaire du Musée archéologique de Dijon*, [Direction: Jannet, M. & F. Joubert] (EUD, 2000): 49-55.

(十一) Courtépe et Béguillet, *Description générale et particulière du Duché de Bourgogne, Bourgogne*, 3e éd., vol. III (Paris, 1967 [Dijon, 1775-1785]): 547; Vitenet, *Moutier-Saint-Jean*: 16-17.

(十二) Urbain Plancher, *Histoire générale et particulière de Bourgogne* (ズル Histoire générale), vol. I (Dijon, 1739-41): 245.

(十三) Rodulfus Glaber, *The Five Books of the Histories (Rodulfus Glabri, Historiarum libri quinque)*, [ed. & trans. John France], (Oxford, 1989): 232-235, 284n.

(十四) Roverius, *op. cit.*: 190; Vitenet, *Moutier-Saint-Jean*: 24-32.

(十五) P. Quarré, “Sur l’art des portails à statues-colonnes,” *Annales de Bourgogne* XXV (1963): 257; William H. Forsyth, “A Gothic Doorway from Moutiers-Saint-Jean,” *Metropolitan Museum Journal* 13 (1979): 33-74; Stratford (1989), *op. cit.*: 178-180.

- (16) Plancher 著 *Histoire générale*: 516 頁 | 11111 頁 石版 高 1.10m 幅 0.8m Vitenet, Moutier-Saint-Jean, Chap. IX.
- (17) Anne Baud, *Cluny, un grand chantier médiéval au cœur de l'Europe*, (Paris: Picard, 2003).
- (18) Peigné-Delacourt, ed., *Monasticon Gallieanum, dessinée vers 1689 par Dom Michel Gemain* (Paris, 1871), Pl. 41.
- (19) Wilhelm Schink, "Zwischen Cluny und Clairvaux", *Die Kathedrale von Langres und die burgund. Architektur d.12. Jahrhunderts*, (Berlin, 1970).
- (20) Masuyo Tokita Darlling, "The Foliate Capitals of Perrey-Jes-Forges: Implications for Cluny," *Gesta* 27/1 & 2 (1988): 73-82.
- (21) Zarnecki, *Gisbertus*: 63, 73, 176.
- (22) ホータンの『フランクの歴史』の柱頭を Zarnecki, *Gisbertus*, pl. 2b を参照。
- (23) Marjorie J. Hall, "Narrative Strategies in Medieval Images of the Journey of Emmaus," *Arte Medievale*, II Serie, Anno XIV, nr. 1-2 (2000): 1-13.
- (24) K. J. Conant, *Cluny, les églises et la maison du chef d'ordre* (Macon, 1968): 203; *Musée Ochier, Cluny III, La Maitor Ecclesia* (ズル Cluny III), (Ville de Cluny, 1988), cat. 53, 59, 61.
- (25) この図像は「エリザベトと少年」となっているが、少年を洗礼者ヨハンの幼児期とするには成長しすぎている。図像の解釈は、Deborah Kahn, "Saint Augustin et le diable. À propos d'un chapiteau de Moutiers-Saint-Jean," *Bulletin Monumental* 162/3 (2004): 189-191.
- (26) 二〇〇五年二月に出土した彫刻断片 (H: 55 ㎝、W: 81 ㎝) は逆手を上げ、口を大きく開いた歪んだ顔の悪魔を示す。
- (27) Seidel, *op. cit.*: 74. この彫刻断片の出土はヴェヘン・スレイとされているが、ヴェヘンでは身廊のスペイン・モザイクにもナルテックスのそれにも彫刻はない。強いて挙げれば、身廊西から3番目のスペイン・モザイクに付けられた「エルクシマの擬人像」のラウエンテルのみである。図版は Armi, *Masons and Sculptors in Romanesque Burgundy*, pl. 128a. 一方、クリュニーには世俗の主題を扱ったスペイン・モザイクの彫刻断片がある。出自の再検証が必要だろう。
- (28) Charles Little, "From Cluny to Moutiers-Saint-Jean: The Origin of a Limestone Fragment of an Angel at The Cloisters," *Gesta* XXVIII/1 (1988): 23-29.
- (29) *Cluny III*, cat. numbers, 78, 83, 111, 113, 114.
- (30) Braude, Pearl F. "Cokkel in oure Cleue Corne; Some Implications of Cain's Sacrifice," *Gesta* VIII/1 (1968): 15-28.
- (31) 拙著前掲『トナイエ報告書』 図版 92、93。
- (32) *La France romane: au temps des premiers Capétiens (987-1152)* (ズル *La France romane*), (Paris: Musée de Louvre, 2005): 218-219.
- (33) この柱頭の元の位置により、葡萄酒の教義的度合もかわって来るだろう。一方、1110年〜1120年代には「月々の労働と黄道十二宮」の図像がヴェズレーやホータンの扉口に登場する。世俗場面への関心は、クリュニーの世俗建築の一部で見たとされるスペイン・モザイクの彫刻の『葡萄の収穫』(Cluny, Musée Ochier, Inv. 896.15.1, 896.15.12) に反映される。
- (34) Pierre Quarré, "Les apports languedociens et rhodaniens dans la sculpture romane de Bourgogne," *Bulletin du centre international d'études romanes*, (1965): 35-43.
- (35) 拙著前掲『トナイエ報告書』 図版 96。
- (36) Classé M.H. en 1979, 石灰石、高 89 ㎝、幅 65 ㎝、柱頭の高さは他のトナイエの柱頭と一致するが、幅は右端欠損のため現状では小さく。Sapin, *op. cit.*: 315-325; Stratford (1980-1981), *op. cit.*: 328, n°16; Corpus, XX, 1999, n°57; Jannet-Vallat et Joubert, *op. cit.*: 52; *La France romane*, cat. n° 276: 366.
- (37) この他に、フランス・モザイクの『カザロ・金持ち』の柱頭が一九二〇年にマンカーン美術館に入った。柱頭の高さ (63・5 ㎝) はトナイエの他の柱頭と一致するが、幅 (70・8 ㎝) は他のものより 5・7 ㎝ 広い。布の質感表現や丸みのある衣文断面、そして顔の造作の特徴は、ブルゴーニュ地方における初期ゴシック様式への移行期のそれと共通する。トナイエの柱頭とすれば、柱頭の制作年代に開きがあったように思われる。 *Romanesque Sculpture in American Collection II: New York and New Jersey*, (Brespols, 1999), pl. 50, cat. 30.
- (38) 拙著前掲『トナイエ報告書』 図版 47、48。
- (39) *Cluny III*: 109.
- (40) Conant, *op. cit.*, fig. 183; Seidel, *op. cit.*: 70; Masuyo Tokita-Darlling, "The Masters of Moutiers-Saint-Jean," 未出版論文、"ミツカン大学" 一九七八年。
- (41) Zarnecki, *Gisbertus*, fig. B7, B8; Seidel, *op. cit.*: 70; 拙著『トナイエ報告書』 図版 59-61。
- (42) 拙著前掲『トナイエ報告書』 クリュニーの例は図版 70-71、59-61 プッシューの例は図版 99-98。
- (43) Calcaire, H. 60cm, W. 63.5cm, Pr. 40.5cm. Moutier の住人の庭にあったものを一九八二年に購入。Sapin, *op. cit.*: 315-325.
- (44) *Cluny III*: 98.

(謝辞)

フォック美術館所蔵のムティエ・サン・ジャン柱頭群に関する研究課題を最初に与えてくださったミシガン大学(現名譽)教授アイリーン・フォルサイス先生に感謝する。クリュニーでの現地調査に際しては、Monuments historiques inspecteur の M. Jean-Denis Salvague、オシエ美術館学芸員 Mlle Brigitte Maurice (一九八八年当時)、オシエ美術館長 M. Piteau および Mlle Virginie Gontayer の諸氏に大変お世話になった。また、査読委員の諸氏からも貴重なご意見をいただいた。あわせてお礼を申し上げる。

ムティエ・サン・ジャン現存彫刻一覧 Masuyo Tokita Darling 作成 2005.5.15

略号：本挿図＝『美術史』の本論文中挿図番号、MTD＝科研報告書(2005年)図版番号、LS＝Linda Seidel(1972)、NS＝Neil Stratford(1986)、FB＝Sculpture médiévale en Bourgogne(2001)

U.S.A.

所在地	彫刻の形体(柱頭の種類)	寸法 (cm)	図像/意匠	図版	備考/来歴
Fogg Art Museum, Harvard Univ.U.S.A. No.1922.17	説話柱頭 台形柱頭	H.61, W62.2, D58.4	エマオの巡礼 左：天使、右：建築+人物	本挿図2.4 MTD, 図11-13 LS,fig. 3	Autun capital
No.1922.19	説話柱頭 ベル型柱頭	H.64.8, W62(上), D58.4 (35.5carved top)	正面：ザカエアへのお告げ 左側面：エリザベトと少年(John?)	本挿図6 MTD, 図19-22 LS,fig. 1	
No.1922.18	説話柱頭 台形柱頭	H.66, W63.5, D58.4 (45.7)	正面：カインとアベルの供犠 右：獅子と人物(サムソン?)	本挿図8 MTD, 図26-28 LS,fig. 2	Cluny bird (Louvre)
No.1922.25	葉飾り柱頭1 ベル型柱頭	H.64.8, W63.5, D.? (36.8)	bell cap.pinetorn	本挿図15 MTD, 図53 LS,fig.12	Cluny III、西正面階上、聖ミカエル祭壇の支柱の彫刻断片
No.1922.24	葉飾り柱頭2ベル型柱頭	H.64.8, W63.5, D.? (36.8)	bell cap.face	本挿図17 MTD, 図62-63 LS,fig.13	
No.1922.26	葉飾り柱頭3ベル型柱頭	H.64.8, W61, D48.3 (35.6)	bell cap. 2段コリント	本挿図12 MTD, 図45-46 LS,fig. 4	Cf.Cluny, Musée Ochier, Corinthian capital
No.1922.27	葉飾り柱頭4ベル型柱頭	H.63.5, W61, D.58.4		本挿図14 MTD, 図50 LS,fig. 6	
No.1922.22	葉飾り柱頭5ベル型柱頭	H.64.8, W63.5, D.58.4	simple trunk,unfinished?	本挿図19 MTD, 図72 LS,fig.11	Cluny III、彫刻断片、Conant,pit
No.1922.23	葉飾り柱頭ベル型柱頭	H.64.8, W63.5, D.54.6 (36.8)	simple foliage w/buds	MTD, 図66 LS,fig.10	
No.1922.21	葉飾り柱頭7ベル型柱頭	H.64.8, W63.5, D.52 (36.8)	simple foliage w/buds	本挿図18 MTD, 図67 LS,fig.9	
No.1922.16	葉飾り柱頭8台形柱頭	H.58.4, W62, D.63.5	3 registered corinthian	MTD, 図51 LS,fig. 5	
No.1922.20	葉飾り柱頭9台形柱頭	H.62, W62.9, D.61	corinthian w/large volutes, rosette	MTD, 図74 LS,fig. 8	
No.1925.9.1	葉飾り柱頭10台形柱頭	H.63.5, W63.5, D.69.8 (38.1top, 5.25bm)	corinthian w/large volutes, rosette	本挿図20 MTD, 図75 LS,fig. 7	

所在地	彫刻の形体	寸法 cm	画像/意匠	図版	備考/来歴
Coll. Mrs. Ethel Brummer New York,	Head with a huge eye			NS, fig. 13	Cf. Cluny fragment from Pit X Conant 1050
Williams College, Mass (USA) cf. coll. Voisenet	Birds and tree, 柱頭?				

Glencairn Museum, PA. No. 09.SP.94	説話柱頭	H.63.5, W70.8 D.36.7	正面:「地獄の脅ちとアブラハムの胸の中のラザロ」 側面:「醜き金持ちの死」	NS, figs. 36-37	Bryn Athyn, ambrose Monell Purchased 1930
--	------	-------------------------	--	-----------------	--

FRANCE

所在地	彫刻の形体	寸法 cm	画像/意匠	図版	備考/来歴
Louvre Museum Inv.R.F.1992.cat.1922-33, N° 1559	説話柱頭、ベル型柱頭	H.64, W63 柱身、直径38	「葡萄の収穫」 Scènes de vendanges	本挿図9 MTD, 図34-36 NS, figs. 17, Aubert (1950, N° 25)	
Louvre Museum Inv.R.F.1850.cat.1922-33, N° 1560	装飾柱頭、ベル型柱頭	H.64, W63	正面:バシリスク、ロゼット	MTD, 図41-42 Aubert (1950, N° 26)	
Musée archéologique, Dijon, Inv. 9836. 1	説話柱頭、台形柱頭	H.63, W50 Pro.0.62	『獅子窟の預言者ダニエル』	本挿図11 FB, pp.52-53, cat.1 NS, fig.10	1982年 Challan-Belval Collec- tion より購入
Musée archéologique, Dijon, Inv.982.2.1	葉飾り柱頭、台形柱頭	H.60, W63.5 Pr. 0405	葉飾り柱頭	FB, pp.54-55, cat.3 NS (1980-81) no.23	1982年 Collection Chanu より 購入
Musée archéologique, Dijon, Inv.982.6.2.	装飾柱頭、ベル型柱頭	H.65, W.55 Pro.0.64	装飾柱頭 4羽の鷲 Bell-capital	FB, pp.52-53, cat.2	1982年 Challan-Belval Collec- tion より購入 CS (1980-81), NS (1980-81)
Musée archéologique, Dijon, I nv.982. 2	葉飾り柱頭、ベル型柱頭	H.31, W.55.5 Pro.0.295	Beads ornamentation on leaf	NS, fig.32	Moutiers ?
Musée archéologique, Dijon, Inv. 982.2.29.	修道院長ビエール(1139-79) 横臥像胸部断片、 回廊北壁1179年以降	H.15.2, W.41 Pro.0.24	横臥像胸部断片	NS, fig.40	Moutiers ? 1982年 Collection Chanu より 購入、回廊北壁にあった。 CS (1980)、NS (1986)
Château de Bard-les- Epoisses (Côte-d'Or) Coll.de Altmayer	葉飾り柱頭断片		葉飾り、アバカス、ロゼット		柔らかな葉の表現はクリュニーの柱頭に類似
Bard-les-Epoisses Coll.de Altmayer	建築モチーフ断片		鱗タイトルのドーム、塔	NS, fig.14	オータン柱頭の建築モチーフ に類似 NS
Bard-les-Epoisses Coll.de Altmayer	鳥、ベル型柱頭		天使のいる柱頭	NS, fig.29	Proportion 異なる、稚拙
Bard-les-Epoisses Coll.de Altmayer	4脚獣(獅子?)の柱頭、			NS, fig.26	
Moutiers-Saint-Jean Coll.de Peyre	溝付き角柱断片			NS, fig.8	
Moutiers-Saint-Jean Coll.de Peyre	窓アーチの断片			NS, fig.9	
Moutiers-Saint-Jean Coll.de Peyre	葉飾り柱頭断片		対角線の構図、Foggと比較可	NS, fig.30	
Moutiers-Saint-Jean Coll.de Peyre	Pilaster 断片		バルメットの枠線の中にロゼット	NS, fig.33	
Moutiers-Saint-Jean Coll.de Peyre	リントル、聖ペテロ両手の断片		右手に鍵をもつ。左手に花飾り。	NS, fig.34	
Moutiers-Saint-Jean Coll.Voisenet,	葉飾り柱頭、台形柱頭			NS, fig.28	
Moutiers-Saint-Jean Coll.Voisenet,					cf original à Williams Col- lege.Mass
Moutiers-Saint-Jean Coll.Beurdeley	説話柱頭断片		聖ミカエルと龍(保存状態悪い)	NS, fig.25	
Moutiers-Saint-Jean Coll.Joseph Challan- Belval	Bénitier, 聖水盤 斜めの葉飾り文帯			NS, fig.27	
Moutiers-Saint-Jean Coll.Chanu,	葉飾り柱頭、台形柱頭		連珠帯、細かな葉飾り	NS, fig.32	Fogg と異なる。
Moutiers-Saint-Jean Coll.Pierre Challan- Belval	葉飾り柱頭、jamb ?		シンプル、	NS, fig.38	Fogg と異なる。遅い?
伝 Villiers-Saint- Benoît Musée d'art régional	頭部断片		若き王の頭(ゴシック)	NS, fig.35	